

日曜大殿説教

「異解の人には」

平成二十五年八月十一日（日）午前九時 於大本山増上寺大殿

天然寺住職 後藤 尚孝

「讃題」

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生
するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四修と申す
ことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思つうちにこ
もり候うなり。

一、信を發す

称名の時に心に思うべきようは、人の膝などをひきはたらかして、や
たすけ給えと云う定なるべし。

お念仏を称える時、心に思うべきありさまは、例えていうなら、
頼るべき人の膝に揺さぶりがつて「どうか、どうか、お助けくだ
さい」と懇願するようなものです。

二、信のすがた

我は烏帽子えぼしもきぬ法然房なり。黒白をも知らざる童子の如く是非も知らざる無智の者なり。只念仏往生あまを仰あぎて信まず。釈迦あまは念仏して往生せよと勸めたまい、弥陀あまは念仏せよ、来迎むかひうせんと仰あせられたり。此の一事を信じて余事は知らず。

私は、烏帽子もかぶれぬ、取るに足らない僧、法然です。

黒白の判別も分からぬ子どものように、物事の是非もわからない無智の者です。ただ、お念仏を称えれば浄土への往生が叶うということを仰ぎ信じているだけなのです。お釈迦さまは「念仏を称えて往生しなさい」とお勧めになり、阿弥陀さまは「念仏を称えよ、されば臨終には迎えに参ろう」とおっしゃっています。このことだけを信じているのであって、そのほかのことは存じ上げません。

三、異解いげの人には

自他宗の学者、宗々しよしよ所立しゆりゆの義を、各別にこころえずして、自宗の儀に違ちがうるをばみなひがごとと心えたるは、いわれなきことなり、宗々みなおのおのたつるところの法門、各別なるうえは、諸宗の法門一同なるべからず、みな自宗の儀に違ちがうべき條は、勿論もちろんなり。

さまざまな宗派においてその教えを学ぶ者が、それぞれの宗派で説く教えは各々一つの体系を持つとは理解せずに、自身の宗派の教えに異なるものはすべて間違いであると理解してしまうのは、正当な根拠を欠いています。各宗派ごとに立てられた教えは、それぞれ個別に体系づけられているのですから、各宗派の教えが同じはずなどありません。他の宗派が自身の宗派の教えと異なるのは当然です。

念仏を修せんものは、余行をそしるべからず、そしらばすなわち弥陀の悲願にそむくべきゆえなり。余行を修しせん者も念仏をそしるべからず。又諸仏の本誓ほんせいにたごうがゆえなり。しかるをいま真言止観しんごんしかんの窓の前には念仏の行をそしる、一向専念の床の上には諸余の行をそしる。ともに我々偏執ががへんしゅうの心をもって義理をたて、たがいにおのおの是非のおもいに住して会釈しやうをなす、あにこれ正義しやうぎにかなわんや。みなともに仏意ぶついちにそむけり。

お念仏を修める者は、他の行を謗そしてはいけません。謗そることは、すなわち阿弥陀さまの慈悲深いご本願ほんがんに背そむく事になるからです。他の行を修める者もお念仏を謗そってはいけません。なぜなら、あらゆる衆生を救わんと願われたみ仏方のお誓たがいに違たがうこととなつてし

ま

うからです。けれども、今現実には真言の行や止観の行を修める者の観点から見てはお念仏の行を誇り、お念仏の行を修める者の立場では他の行を誇っています。お互いに偏った執着の心で教えを理論立て、お互い自分たちだけの価値判断に執着して解釈しているのです。こんな状態ではどうして正しい教えにかな適う事などありましようか。みな、共々にみ仏の教えに背いているのです。

難者いわく、きんじゆ今來の念仏者、わたくしの義をたてて、悪業をおそるるは弥陀の本願を信ぜざるなり、すへん数遍をかさぬるは一念の往生をうたごうなり。げんごう行業をいえば、一念十念にたりぬべし。かるがゆえに数遍をつむべからず、悪業をいえば、しじゆごう四重五逆なおうまるるゆえに諸悪をはばかるべからずといえり。この義まったくしかるべからず、せんとん釈尊の説法にも見えず、善導のみこころ釈義にもあらず、もしかくのごとく存ぜんものは、惣じて諸仏の御心にたごうべし、別しては弥陀の本願にかのうべからず。

お念仏の教えを非難する人が「近頃の念仏者どもは自分勝手に解あ釈し、『悪業の報いを恐れるようでは阿弥陀仏の本願を信じ切っていないのだ。何遍も重ねて念仏を申すのも、たった一遍の念仏で往生できるといふ教えを疑うことになる。往生のために称える念仏についていえば一遍や十遍で事足りる。したがって何遍も回数を重ね

る必要などない。悪業についていえば四つの重罪や五つの逆罪を犯した者でも、なお極楽への往生が叶う。それ故、もろもろの悪業といえどもはばかることはないのだ』と述べている」と述べております。

このように指摘された解釈はまったくもって誤りです。お釈迦さまのご法説にも見当たりませんし、善導大師のご解釈でもありません。もし、このように理解している人は、そもそもあらゆる仏さまの御心に背いてそむおりますし、ことに阿弥陀さまのご本願に沿うものではありません。